歳時世相篇 20

サムハラガン

雨季のインドの「集団結婚式」

「サムハラガンに行く?」。フィールド先の村で出会う女性や子どもたちから、この質問を受けた。「サムハ」は集団、「ラガン」は結婚を意味する。つまり、翌週におこなわれる集団結婚式に行くかどうかの質問であった。挙式は、集団結婚式委員会によって新しいスタイルでおこなわれた

上羽陽子（うえば ようこ）
民博 文化資源研究センター
専門は民族芸術学、染織研究。インドを中心に牧畜を生業とする人びとのものづくりについて研究している。最近は、ラクダやヤギなどの毛を、人びとがどのように利用しているかに注目している。

二〇〇八年一一月三〇日、インド西部グジャラート州カッチ県で二三組の集団結婚式が執りおこなわれた。小雨の降るなか、二三組の新郎新婦が同じ時間に誕生したのである。

私が参加したのは、長年調査をおこなっているヒンドゥー教のラバーリーというコミュニティーでの集団結婚式であった。ラバーリーの人びとは、乾燥地帯のカッチ県で牧畜を生業としている。各自、特定の村に家はあるものの、家畜に充分に草を食（は）ませるために、家族の一部が一年の大半を移動しながら生活している。そのため、結婚式は、家族が家畜とともに村へ戻ってくる雨季に、一斉におこなわれてきた。

クリシュナ神の誕生祭の日

数日間にわたって、さまざまな儀礼で構成される結婚儀礼のなかで、婚姻の成就は、花婿と花嫁が火の周りを四回まわる儀礼によってはかられる。この儀礼は、花嫁の家の前でおこなわれ、集まった男性親族は、花婿と花嫁の登場を待つあいだ、花婿や両家の男性親族をからかう冗談などを言い続ける。一方、女性親族は、結婚を祝福する歌をうたい続ける。

真夜中、火の周りを二人がまわる姿は、結婚式が終わった数日間の話題の中心であり、誰もがその様子をじっと見つめ続ける。

元来、ラバーリーでの結婚式は、ヒンドゥー教の太陰太陽暦の雨季にあたるシュラヴァーン月（西洋暦では七〜八月）の黒分（満月から新月までの一五日）の第八日目におこなわれることが多かった。この日は、クリシュナ神の誕生祭「クリシュナ・ジャナム・アシュタミー」の日でもある。したがって、同じ日にひとつの村で一〇〇組ほどの結婚儀礼がおこなわれることもあった。

しかし今回は、これまで執りおこなわれていた集団結婚式とは、明らかに様子が異なっていた。ラバーリーでは、二〇〇七年に集団結婚式委員会という組織を立ち上げ、同年二月には三七組による集団結婚式が開催されている。今回は、委員会主催による第二回目のサムハラガンであった。

数千人の雑踏とざわめきのなかで

会場である広場の中央に、およそ二メートル四方の婚礼用のブースが二三組分、列をなして設置されていた。その列の正面には演壇が設けられ、会場の両脇には二三人の花婿・花嫁用の控え室がビニールシートによって小屋状に間仕切りされていた。

婚礼用ブースは、演壇から近い順に若い番号がつけられている。私が参加することになったのは、調査先で親戚にあたる女性が花嫁として参加するからであった。なんと彼女は二三組中、一番の番号を獲得していた。彼女の兄は、「これは僕が委員会の事務所へ一番に登録にいったからだ」と自慢げに話していた。

各ブースには、担当の司祭者がついているが、すべての段取りは、正面の演壇前に座っている司祭者のマイクをとおした声によって指示される。しかし、マイク音量が大きすぎて音割れしていることや、数千人におよぶ関係者のざわめきによって、若い番号のブースには指示がいくものの、後方では混乱がおきていた。

これはあとで判ったのだが、一緒に出かけた同じ村の約六〇人のなかで、結婚式のクライマックスである、炎の周りを四回まわる儀礼を実際にみていたのは、半分にもみたなかったのである。なにをしていたか聞いてみると、「雨も降っていたし、寒かったのでバスの中でおしゃべりをして待っていた」という。

村での結婚式であれば、冗談を言ったり、祝福の歌をうたったりと各々の役割があり、またそれを自然におこなうような雰囲気がある。しかし、このような集団結婚式では、スピーカーから聞こえる大音声と、ざわついた空気に嫌気がさして、バスに乗って会場に行くことで、親族として参加したという責任を果たしているようであった。

複数の花婿と花嫁が介添えとともに練り歩く

結婚式の合理化の結果

じつは、インドではこのような集団結婚式は、けっして珍しいことではなく、古くからヒンドゥー教やイスラム教の人びとのあいだでおこなわれてきた。インドの結婚式に、莫大な費用がかかることが一因と考えられる。

まだまだ見合い結婚が主流のインドにおいて、さまざまな条件に合う結婚相手を見つけることは大仕事である。さらに、パートナーが決まってからでも、実際の結婚にいたるまでには、婚資や持参財をどちらがどのように負担するか、といった交渉が大きな問題としてある。そして、この中には、婚礼にかかる莫大な費用が含まれている。

たとえば、新婦が身に着ける装身具類、花婿行列のための車やトラックなどの車両代、婚礼日におこなわれる余興の歌や踊りの費用、招待客への歓待としての食事や嗜好品など、挙げるときりがない。集団結婚式の利点は、同じ日に婚礼をおこなうことによって、これらの経費を大幅に削減できることである。

今回のラバーリーの集団結婚式の大部分の費用は、コミュニティー内の委員会への寄付によってまかなわれていた。参加した人びとは、結婚式自体よりも、むしろ結婚式が終わったあとに、演壇上で始まる族長と委員のメンバーによる講話を熱心に聞き入っていた。

なかでも、誰がいくら寄付をしたかといった発表に皆耳をかたむけていた。現金以外にも、二三組全員にお揃いの衣服タンスやネックレスなどを寄付する人びともおり、参加した人びとは自分の村に戻ると、誰がなにをどれくらい寄付したかを口々に噂していた。

＊

こういった寄付によって成り立つ集団結婚式のニュースは、現在のインドで時折流れる。たとえば、これまでになかったヒンドゥー教のカップルとイスラム教のカップルが合同で結婚式を挙げたというニュースも聞かれるようになった。この場合の費用は、同郷の在外インド人の寄付によってまかなわれたという。

委員会によると今年の一一月にも集団結婚式が開催されるという。新しいスタイルの結婚式としてラバーリーのなかで定着するか見ものである。